

〔十訓抄二〕楊梅大納言顯雅卿は、若くよりいみじき言失をぞし給ひける、神無月の比、或宮原に参りて、みすの外にて女房たちと、物がたりせられけるに、時雨のさとしければ、供なる雑色をよびて、車のふるに時雨さし入よとの給ひけるを、車軸とかや、おそしやとて、みすの内笑ひあはれけり、或女房の御云たがへ常に有と聞ゆれば、げにや御祈の有ぞやといはれければ、其ために三尺の鼠を作て、供養せんと思侍るといはれたりける、折節鼠のみすのきはを走り通りけるを見て、觀音に思まがへて、の給けるなり、時雨さし入よには増りて、おかしかりけり、

〔古事談二〕師賴卿多年沈淪籠居、拜任中納言後勤仕釋奠上卿、作法進退之間、於事成不審、粗問於人、其時成通卿參議之時列坐云、年來御籠居之間、公事御忘却歟、ウヒシク被思食之條尤道理也、云々、師賴卿不謂返事顧聴獨言曰、入大廟每事問者奈云々論語文成通卿閉口止、後日逢人云、無思分之方、出不慮之言畢、後悔千回云々、十訓抄又見二

〔九條殿遺誠〕會人言語莫多、又莫言人之行事、唯陳其所思兼觸事、不可言人言也、人之灾出自口、努力慎之慎之、

〔拾芥抄下本誠〕源信僧都四十一箇條起請

應重禁制條々略

○中

一全可斷多言戲咲

○中

〔十訓抄四〕可誠入上事

已上四十一箇條、可如眼精矣、

或人云、人は慮なく云まじき事を、口とくいひ出し人の短をそしり、したることを難じ、かくすことを顯し、耻がましきことをたゞす、これらすべて有まじきわざなり、我は何となく云ちらして、思もいれざるほどにいはる、人思つめていきどをり深く成ぬれば、はからざるに耻をもあた